EⅣ論文

# 感覚動詞と知覚動詞のアスペクト
## －局面指示体系による図示－

関口 美緒


### 要　旨

心理を表現する動詞は，動作動詞などの一般動詞と比べ，話者の内在化した心の時間経過を表すため，アスペクトが表現しにくいとされてきた。しかし，関口(2014)は，今泉(2000)の「局面指示体系」の図示法により，「心理動詞のアスペクト」の図化を行った。心理動詞で時相が図示できることは画期的なことである。本稿では特に感覚動詞と知覚動詞の異同をこの図示法で示すことに焦点を当てた。また，「知覚動詞」では，閾値（しきいち）を持つことが認識できる動詞では，身体等の物理的変化よりは，閾値の達成が事象開始の認識をもたらすことを述べた。そして，「肩が凝る」という知覚動詞を例として，7つの時相表現のあり方を示した。


**キーワード：アスペクト，感覚動詞，知覚動詞，局面指示体系，閾値**

### 1　感覚と知覚と情動

「感覚・知覚・情動」の関係は，早石(1995:64)によれば，以下のような3段階である。

〈1〉「感覚刺激の受容」
↓
〈2〉「感覚刺激の生物学的価値の評価」
↓
〈3〉「生物学的価値評価に基づく情動表出および情動の主観的体験」

〈1〉感覚は単純に刺激が信号として受容され，身体が反応するものである。〈2〉これが生物学的な価値の基準で評価されて，知覚となる。〈3〉この知覚を基に判断されたものが，感情を引き起こす。

早石の説を筆者が簡略化した。以下のようになる。右横には関係の動詞を示す。

| | |
|---|---|
| 〈1'〉「感覚」 | 感覚動詞 |
| ↓ | |
| 〈2'〉「知覚」 | 知覚動詞 |
| ↓ | |
| 〈3'〉「情動」（感情） | 感情動詞 |

この3段階のそれぞれに，その段階で使用される動詞がある。今回はそのうちの「感覚動詞」と「知覚動詞」をとりあげ，局面指示図を用いて表現してみたい。「感情動詞」は多種の要素が加わるので，別の機会にゆずることにする。

## 2　感覚動詞と知覚動詞

### 2.1 先行研究を参考にして表を作成

今回扱う動詞を明確にするために，動詞を表に示した。次ページの表1を作成したが，これは吉永（2008:89）と，工藤（1995:77）の先行研究を参考にしている。

吉永は知覚動詞と感覚動詞を分けていないので，参考にする際に，以下のように減算して「知覚動詞」を得た（関口:2014 図2-5 参照)。

(a)　知覚感覚的心理動詞（吉永）－ 受動的情報感知動詞（関口）=　知覚動詞
(b)　知覚感覚的心理動詞（吉永）－ 感覚動詞〈自動詞〉（宮島）　=　知覚動詞
(c)　内的情態動詞の感覚動詞（工藤）　=　知覚動詞

(a) 吉永（2008:89）の「知覚感覚的心理動詞」の場合，そこから五感感覚器官で受容されることを表す動詞「受動的情報感知動詞（関口2012:5)」を引いたものを知覚動詞とした。

(b) これは，吉永（2008）の「知覚感覚的心理動詞」から，宮島（1972）の「感覚動詞」の「自動詞」（「他動詞」は「動作動詞」となるため，「心理動詞」の対象から除外する。）を引いたものと考えてもよい。つまり，吉永の「知覚感覚的心理動詞」から宮島の「感覚動詞」を引けば，残りは「知覚動詞」ということになる。

(c) 本稿では，工藤で「感覚動詞」とされている「知覚」に関する動詞は知覚動詞に相当すると解釈する。医学・生理学・心理学および宮島（1972），関口（2012）等が共通認識としている五感の動詞は「感覚動詞」であるという理解から，工藤（1995:77）の「感覚動詞」を「知覚動詞」として扱うこととなった（関口2014)。

### 2.2 表に示す

今回考察の対象となる感覚動詞と知覚動詞を一覧表で示せば，表1のようになる。

この表を作成するに当たって，さらに次のようなことを述べておきたい。

※「感覚動詞」「知覚動詞」の区分の判断は，工藤の分類を参考にした。解釈については上の（c）を参照されたい。
※「和語・漢語」「派生的」「擬態語」の区分は吉永の分類を参考にした。
※「派生的」というのは，「［名詞］が［動詞］」（例: 喉 が 渇く）のように，名詞と動詞が組み合わされたものである。
※ 本表は，工藤と吉永を組み合わせたものが元になっている。
※ 吉永（2008:89）は「胸がすく」を「知覚感覚的心理動詞」に分類しているが，「胸がすく」の意味から，関口（2014）は「感情的心理動詞」に分類している。表1では，（　）内に入れた。
※「ちかちかする」は閃輝暗点という症状で視覚（感覚野）に関連しているように思えるが，発生の原因はさまざまであるため，「知覚動詞」に分類する。

**表1　感覚動詞・知覚動詞一覧表**（工藤1995:77，吉永2008:89，関口2013表2参照）

| | 感覚動詞 | 知覚動詞 |
|---|---|---|
| 和語・漢語 | **継続動詞型，存在動詞型**<br>[視覚] 見える<br>[聴覚] 聞こえる<br>[嗅覚] 香る，臭う | **瞬間動詞型**　[閾値]あり<br>くたびれる，疲れる<br>**継続動詞型，存在動詞型**<br>痛む，うずく，感じる，くらむ<br>痺れる，震える，ほてる，麻痺する<br>むかつく |
| 派生的 | **継続動詞型，存在動詞型**<br>[嗅覚] 香りがする，匂いがする<br>[味覚] 味がする<br>[触覚] 手触りがする<br>肌触りがする | **瞬間動詞型**<br>[閾値]あり<br>胃がもたれる，おなかがすく<br>肩が凝る，喉が乾く，腹が減る<br>[閾値]なし<br>足がつる，喉が腫れる，筋がちがう<br>歯茎が腫れる，鼻がつまる<br>**継続動詞型，存在動詞型**<br>胃がさしこむ，悪寒がする<br>頭痛がする，吐き気がする<br>(胸がすく) |
| 擬態語 | **継続動詞型，存在動詞型**<br>[触覚] ごわごわする,ざらざらする<br>ちくちくする,つるつるする<br>ぬるぬるする,ねとねとする<br>ひやっとする,ひりひりする<br>べとべとする,むずむずする<br>[嗅覚] つんとくる | **瞬間動詞型**　[閾値]なし<br>ぐったりする，すっとする<br>ぴくっとする<br>**継続動詞型，存在動詞型**<br>がくがくする，がんがんする<br>きりきりする，くらくらする<br>じんじんする，ずきずきする<br>ぞくぞくする，ちかちかする<br>どきどきする，むかむかする |

「閾値（しきいち）」については 5.2 参照。
「閾値なし」は絶対的な基準ではない。判断によっては閾値があり得る。
瞬間動詞型には網がけをした。

### 3　感覚動詞と知覚動詞の局面を図示する

感覚動詞と知覚動詞の各局面を図で示すのに用いる図示法は，「日本語構造伝達文法」の表示法である（今泉 2000:117-160 参照）。日本語構造伝達文法では，テンスを「時」とし，アスペクトを「相」としている（今泉 2014:211）。

アスペクトは，局面の集合体として表現するので，次のような図示となっている。

### 3.1 出来事を6つの局面で捉える

出来事（事象）は6つの局面を持ち，下のように図示される。

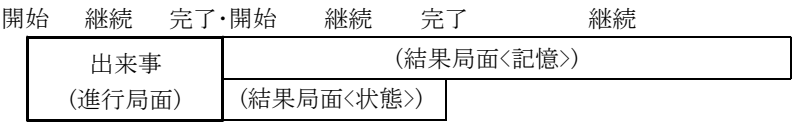


**図1 アスペクト（相）の図**　（今泉:2000 p.123 図13-2）

これと同じことを簡略化して，下のように図示することが多い。それぞれの局面を○数字で示している。(局面はこのように○数字でも表すことがある。)

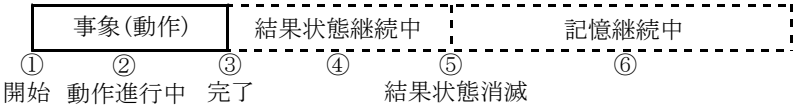


**図2 6つの局面の図**　（今泉:2015 p.37 図S1-98 による）

④は「結果状態継続中」を表し，⑥は「記憶継続中」を表している。

### 3.2「動き」と「存在」

出来事には，「動き」を表すものと，「存在」を表すものとがある。この出来事は時間の流れの中を流れて行く「舟」に見立てられている（今泉:2000 p.142-154)。

「動き的出来事」のアスペクトの舟　　動詞は「動き動詞」

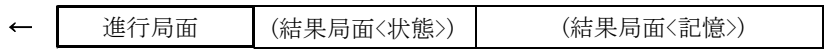


**図3　動き的出来事の図**　（今泉:2000 p.143 図16-3）

「存在的出来事」のアスペクトの舟　　動詞は「存在動詞」

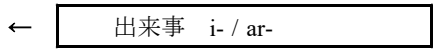


**図4　存在的出来事の図**　（今泉:2000 p.143 図16-4）

### 3.3 時と相の組み合わせ

日本構造伝達文法では，テンスを「時」とよび，アスペクトを「相」とよんでいる。両者を合わせれば「時相」となる。この「時相」という語により，テンスとアスペクトの両方を捉えていることになる（2016:10)。この「時相」で，事象（出来事）の各局面を示す方法を「局面指示体系」としている。私たちの実際の発話は，「局面指示体系」にのっとっている。

この「局面指示体系」は，次のような図で表わされ，2桁の数で表せるようになっている。たとえば，下の図5の言及線[42]は，40の時間的位置で発話し，局面2に言及していることを示している。動詞が「読む」なら，[42]は「読んでいた」となり，この[42]は，「過去・進行中」を表すことになる。「時・相」が捉えられている。

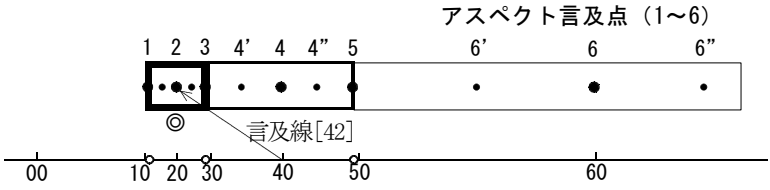


**図５ 現在点と言及点の位置関係（肯定）**（今泉:2000 p.155 図17-1）

### 3.4 相で動詞を分類する

動詞は，時相に関して，使われ方に個性がある。この論文に関する限りでの動詞の使われ方に関していえば，相（アスペクト）の面に着目するとき，「継続動詞型，瞬間動詞型，存在動詞型」の3つの型があることになる。

**表2 動詞の相による分類**　　動詞例は一般動詞

| 動詞 | 型の名 | 動詞例 | 型の説明 |
|---|---|---|---|
| 動き動詞 | 継続動詞型 | 読む | 図5に当てはまる。 |
| | 瞬間動詞型 | 死ぬ | 図5に当てはまるが局面2がない／ほとんどない。 |
| 存在動詞 | 存在動詞型 | ある | 図4，図7に当てはまる。 |

動き動詞を，「継続動詞型」と「瞬間動詞型」に分けている。両者の違いは，局面2にある。「継続動詞型」は「読む」のように，局面2が一定程度継続する。「瞬間動詞型」は「死ぬ」のように，局面2が瞬間的に生起する。

## 4　感覚動詞の時相

「感覚（五感）」は外界からの刺激に反応して起こる。「感覚認知」は，外界からの刺激を受け続ける「刺激時間」との間に同時性がある。したがって，「感覚動詞」のアスペクトは，刺激を受け続けている時間が進行局面として存在する。

「感覚動詞」には，「継続動詞型」と「存在動詞型」がある（表3参照）。

### 4.1 継続動詞型

（1a）日が暮れても，まだ山の輪郭ははっきり見えテイル。[22]（視覚動詞）

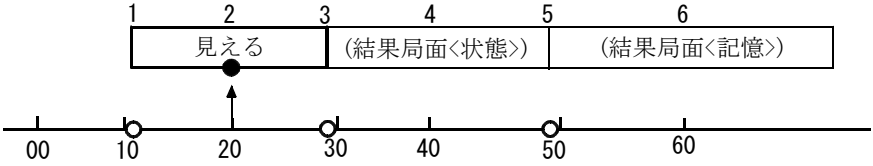


**図6 継続動詞型の[22]**

「継続動詞型」として，[22]のほかの言及線でも表現できる。例を挙げる。

(1b) 山の輪郭ははっきり見えル。[02]

(1c) 山の輪郭ははっきり見えテイタ。[42]

(1d) 山の輪郭ははっきり見えタ。[43]

(1e) (さっき) 山の輪郭ははっきり見えテイル(ので，絵に描ける)。[44]

(1f) (当日は) 山の輪郭ははっきり見えテイタ。[62]

(1g) (当日は) 山の輪郭ははっきり見えテイル。[66]

### 4.2 存在動詞型

「感覚動詞」は「存在動詞型」も持つ。「存在動詞型」は[22]をル形で表す。

(1h) 日が暮れても，まだ山の輪郭ははっきり見えル。[22]

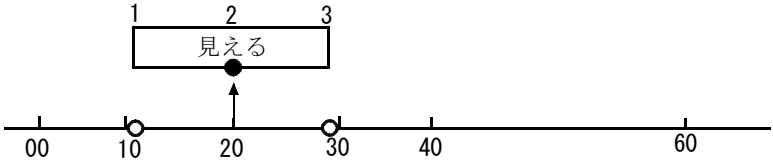


**図7 存在動詞型の[22]**

「存在動詞型」としての，その他の言及線の例も挙げる。

(1i) 山の輪郭ははっきり見えル。[02]

(1j) 山の輪郭ははっきり見えタ。[42]

(1k) 山の輪郭ははっきり見えタ。[43]

(1l) (当日は) 山の輪郭ははっきり見えタ。[62]

### 4.3 感覚動詞は継続動詞型と存在動詞型の2つを持つ

以上のことは，感覚動詞全般に共通する。このことを示すために，他の感覚の例も挙げておく。それぞれ a (継続動詞型) と h (存在動詞型) で例を挙げる。

(2a) 暗闇から，ごそごそ音が聞こえテイル。[22] (聴覚動詞)

(2h) 暗闇から，ごそごそ音が聞こえル。[22]

(3a) 香水の匂いがしテイル。[22] (嗅覚動詞)

(3h) 香水の匂いがスル。[22]

(4a) ワサビの味がしテイル。[22] (味覚動詞)

(4h) ワサビの味がスル。[22]

(5a) 絹の肌触りがしテイル。[22] (触覚動詞)

(5h) 絹の肌触りがスル。[22]

擬態語の「感覚動詞」も同様である。例を挙げて示す。

(6a) 表面はざらざらしテイル。[22] (触覚動詞)

(6h) 表面はざらざらすル。[22]

(7a) 化学薬品の匂いがつんときテイル。[22] (嗅覚動詞)

(7b) 化学薬品の匂いがつんとくル。[22]

## 5　知覚動詞の時相

### 5.1「閾値」で知覚か,「物理的変化」で知覚か

感覚として受信された刺激信号は，神経系に伝達され，「知覚」として更なる高次認知機能として働く。

「知覚動詞」は言語化までには一定の「自覚時間」という必要時間が存在することになる。「自覚時間」は実際に「生理的な身体変化」が生じる2通りの認知の時差を生じる。

〈1〉　1つは蓄積した生理的な身体変化の症状が閾値（threshold）を超えたことによって生じる認知までの時差である。

〈2〉　もう1つは，明らかな物理的現象が生じ，より客観的にその身体変化知覚を認知するまでの時差である。

〈1〉の「閾値」の考えられる動詞は瞬間動詞型にみられる。閾値の達成という事象の始まりは局面①にあり，③で完了する。局面②の実現は，瞬間的であるので，ないに等しい。事象の継続は局面④になるので，実質的な開始は局面③であると感じられる。

「感覚動詞」は「受動的」であるのに対し，「知覚動詞」は一定の認知過程を生じる（関口2014)。

### 5.2「閾値」のある瞬間動詞型動詞

表1の動詞で，明確に「閾値」があると考えられるのは，知覚動詞のうち，瞬間動詞型の以下の語である。

「和語・漢語」……「疲れる」,「くたびれる」

「派生的」……「胃がもたれる」,「肩が凝る」,「おなかがすく」,「腹が減る」,「喉が乾く」

**[疲れる]**　いま,「疲れる」という動詞で考えてみたい。

ある活動をすると，筋肉内に筋肉疲労物質である乳酸がたまる。これが一定量をこえると「疲れ」として知覚される。この一定量を「閾値」とよぶのであるが，この乳酸の量が「閾値」をこえることにより,「疲れた」と知覚される。

つまり，乳酸の量は，0からたまって「閾値」に至るまでは,「疲れ」として知覚されない。それが「閾値」に達した瞬間に「疲れ」として知覚される。図8の三角形は，この「疲れの蓄積」の過程を図化したものである。

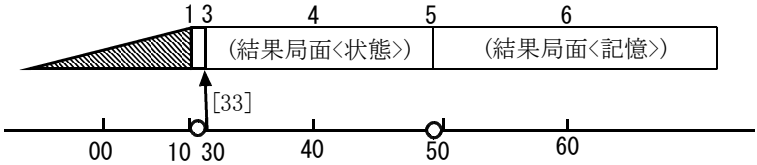


**図8 閾値の図示**

局面1の前の三角形は，時間とともに徐々に乳酸値が高まっていることを示してい

る。元の図，つまり，相（アスペクト）の図では，高さに意味はないが，三角形の高さには意味がある。局面1のところで元の図と同じ高さになっているが，これは乳酸値が閾値に達したことを意味している。これは，この段階で疲労が知覚されたことを意味する。

疲労が知覚されたことは「疲れた」という表現で示される。これは言及線では[33]となる。（言及線がやや左に傾いているので，直近過去のタで表現される。今泉 2000: 159）

疲労が知覚されたあとは，「疲れている」と表現される。これは局面4の「結果状態継続中」を表している。言及線は[22]ではなく，[44]である。「疲れた」ことが知覚される状態は[33]から始まる。

**[少し疲れる]** 「少し疲れた」「少し疲れている」という表現もある。局面としては，これは「疲れ」を知覚したあと・局面4の表現であることに変わりはない。「少し」という語があり，これは「少し」のない場合より閾値が低いことを示している。閾値は表現主体の意識によって増減することがあることを意味している。

**[くたびれる]** もう1つの疲労系の動詞「くたびれる」（和語・漢語）は，「疲れる」と同様に考えられるので，ここで改めて述べることはしない。

**[おなかがすく，腹が減る，喉が渇く]** 次に，派生的動詞の「おなかがすく」，「腹が減る」，「喉が渇く」についてであるが，これも，血糖値の減少や，血中のナトリウムイオン濃度の上昇が閾値に達することによって知覚される。

以上の，閾値の存在が考えられる瞬間動詞型動詞をまとめれば，次のようになる。

疲労系 …… 疲れる，くたびれる，肩が凝る
空腹系 …… おなかがすく，腹が減る
枯渇系 …… 喉が渇く

これらの動詞は「開始前」の段階が存在し，因子の数値が「閾値」に達することによって，動詞の「開始」（局面1）が生起する。事象は瞬間的に完了するので，局面2はなく，すぐ局面3になり，局面3が開始のように感じられる。

### 5.3 物理的変化のある「瞬間動詞型」動詞

「瞬間動詞型」動詞の特徴は，動詞が「開始」しても瞬間的に完了するので，局面2はなく，すぐ局面3になる。あたかも局面3が動詞の開始であるかのようである。

5.2で見たものは，この開始に「閾値」が関わるものであるが，この開始が「閾値」に関わらないものも多い。その場合は物理的変化が動詞の開始をもたらす。（「閾値の達成」も，厳密にいえば「物理的変化」といえるが，ここでは両者を区別する。）

**[足がつる]** 「足がつる」という表現を例にして考えてみたい。「足がつる」ことは瞬間的に生起する。「足がつっていない」状態から「足がつった」状態への変化である。テイル形の「足がつっている」というのは，[22]ではなく，[44]を表している。ここに「瞬間動詞型」動詞の特徴がある。

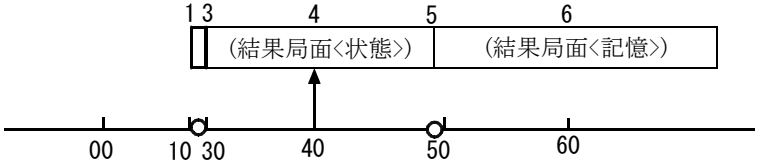


図9　「瞬間動詞型」動詞のテイルはふつう[44]

このような「瞬間動詞型」動詞には，表1に示したように，「派生的」の「胃がもたれる」「肩が凝る」など，擬態語の「ぐったりする」「すっとする」などがある。

次に，「継続動詞型」,「存在動詞型」を見てみる。

### 5.4 物理的変化のある「継続動詞型」,「存在動詞型」

知覚動詞の，以下の動詞は「継続動詞型」動詞でもあり，「存在動詞型」動詞でもある。表1を参照されたい。

「和語・漢語」 …… 「感じる」「ほてる」など
「派生的」 …… 「頭痛がする」「吐き気がする」など
「擬態語」 …… 「がんがんする」「どきどきする」など

これらは，それぞれに使用の程度の差はあるが，局面2を，「継続動詞型」の「テイル」でも表せ，「存在動詞型」の「ル」でも表せる。これは，4節で扱った「感覚動詞」と同じである。

テイル／ル で示してみる。継続動詞型／存在動詞型 の示し方である。

「感じる」 …… この飲料に甘みを感じテイル／感じル。
「ほてる」 …… 顔がほてっテイル／ほてル。
「頭痛がする」 …… 頭痛がしテイル／頭痛がすルので，ちょっと休む。
「吐き気がする」 …… 飲み過ぎて吐き気がしテイル／吐き気がすル。
「がんがんする」 …… 頭ががんがんしテイテ／がんがんシテとても話せない。
「どきどきする」 …… 心臓がどきどきしテイル／どきどきすル。

## 6　感覚動詞と知覚動詞の異同

以上，4節，5節で検討した，感覚動詞と知覚動詞の異同について表にすれば，次のようになる。感覚動詞には瞬間動詞型がない。

表3　感覚動詞と知覚動詞の異同　　瞬間動詞型に違いがある

| | 感覚動詞 | 知覚動詞 |
|---|---|---|
| 瞬間動詞型 | なし | ・閾値を持つ知覚動詞は開始前の段階を想定。<br>・閾値を持たない知覚動詞も多い。 |
| 継続動詞型 | あり | あり |
| 存在動詞型 | あり | あり |

## 7　語例検討

以上で検討したのは基本的なことがらである。動詞にはそれぞれに実際の使い方がある。そこで，ここに「肩が凝る」(知覚動詞・派生的) を取り上げて，一例を示す。

### 7.1 肩が凝る

「肩こり」などの「痛み」は，筋肉の凝り，血流の欠如，神経の圧迫等からなる。これらの「痛み」は，一過性の場合もあるが，何年も継続するといった慢性的な場合もあり，様々なケースが考えられる。そのほか，時相の表し方にも異同があるので，7つの時相として考えてみたい。

### 7.2「肩が凝る」に見られる7つの時相

#### (a) 時相表現

疲労や痛みが「閾値」を超えたことを時と相で表現する。言及線[44]。

(8) 仕事を終えて，肩が凝っテイル。(時:現在・相:結果状態)　：

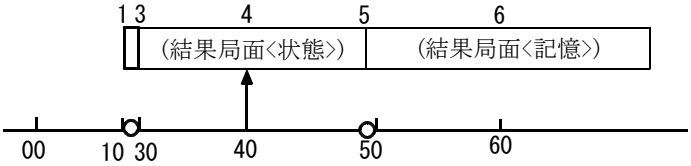


**図10 肩が凝っている……現在・結果状態**

#### (b) 補助を伴う表現

重い荷物を持ち続けているような場合に，「肩の痛み，肩こり」が生じ始めていることを知覚する。閾値は低く設定され，「テクル」等の補助的な動詞を伴う。

(9) 重い荷物を肩に乗せて運んでいるので，肩が凝ってきタ。

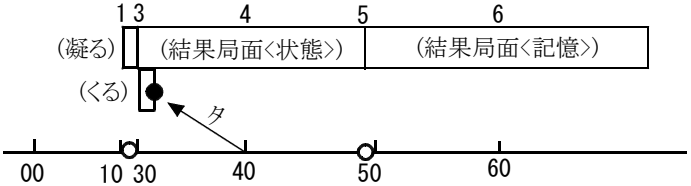


**図11 肩が凝ってきた……補助を伴う表現**　(今泉:2016 p.40参照)

#### (c) 繰り返しの表現

「肩が凝る」のが繰り返される場合もある。

(10) この3日というもの，毎日肩が凝っテイル。

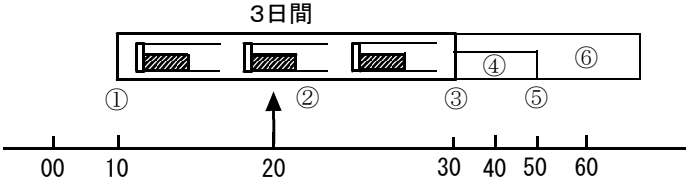


**図12 毎日肩が凝っている……繰り返しの表現**　(今泉:2016 p.37参照)

### (d) 慢性の表現

「肩が凝る」のが慢性になっている場合もある。肩が凝った状態が間断なく続いている状態であるという解釈から，下のような図になる。

(11) 半年間ずっと肩が凝っている。

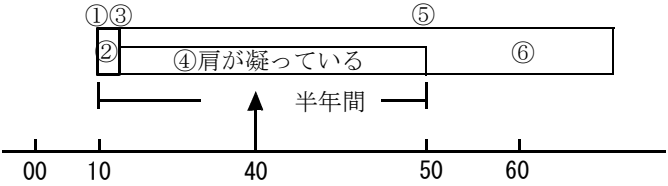


**図13 半年間ずっと肩が凝っている……慢性の表現**　(今泉:2016 p.37参照)

以上の(a)から(d)までは，事象「肩が凝る」を時相において捉えたものであるが，次の(e)から(g)は，時と相の認識の有無において捉えたものである。

### (e) 相のみの表現

たとえば，きのうのことなのに，過去を表す「タ」が使われない。下の例では，結果状態という「相」だけが表現されている。時を示す目盛りはない。

(12) 昨日の夕方は，長時間緊張して書類作成をして，肩が凝っている。

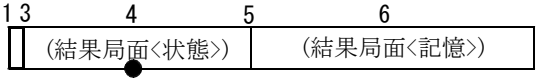


**図14 昨日の夕方は肩が凝っている……相のみの表現**　(今泉:2016 p.68 参照)

### (f) 時のみの表現

事象の1つひとつの局面には関心がなく，事象の全体を1つのまとまりとして捉え，時のみを表現する場合がある。(「◎」は事象の全体を1つのまとまりとして捉える記号である。)

(13) 長時間緊張して書類作成をして，肩が凝った。[4◎]

**図15 肩が凝った……時のみの表現**　(今泉:2016 p.66 参照)

これは，[4◎]である。しかし，表現としては，(a)時相表現で捉えて完了局面が表された[43]と同じになる。ことばの段階では同じ表現になっても理論的には異なる。

「相」が入らないので，「肩が凝っている」[44]の表現などはない。発話時点から捉えた◎以外は表現できない。

### (g) 事象単位表現

時も相も表現しないで，事象の生起そのものを表現する場合もある。日記などではこの表現を使うことがある。発話時点に関わりがないので，時を表す目盛りは書かない。

(14) 長時間緊張して書類作成をして，肩が凝る。



**図16 肩が凝る……事象単位表現** （今泉:2016 p.70参照）

以上，実際には，「肩が凝る」は (a)～(g) のいずれかで表現される。

## 8 まとめ

心理を表す動詞は，動作を表す一般動詞と比較して，アスペクトを証明するのが困難であった。特に，知覚動詞では，生理現象が認知されるに至る過程が複雑であり，捉えがたかった。しかし，本稿では，「日本語構造伝達文法」が提示する「局面指示体系」の事象図示法により，感覚動詞と知覚動詞の時相を図示することができた。そして，両者の異同に関して次のことが分かった。

① 感覚動詞と知覚動詞は，「継続動詞型」と「存在動詞型」で共通している。
② 知覚動詞には「瞬間動詞型」があり，閾値の関わるものと関わらないものがある。

また，本稿では，語例として「肩が凝る」を示すことにより，実際に行われる表現の，時相に関するより細かい分類を見出すことができた。

## 参考文献

今泉喜一（2000）『日本語構造伝達文法』 揺籃社
今泉喜一（2003）『日本語構造伝達文法　発展A』 揺籃社
今泉喜一（2005）『日本語構造伝達文法』（05年改訂版）揺籃社
今泉喜一（2014）『主語と時相と活用と －日本語構造伝達文法・発展C』 揺籃社
今泉喜一（2015）『日本語のしくみ(1) －日本語構造伝達文法 S－』 揺籃社
今泉喜一（2016）『日本語のしくみ(2) －日本語構造伝達文法 T－』 揺籃社
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト－現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房
国立国語研究所（1985）『現代日本語動詞のテンスとアスペクト』
関口美緒（2012）「日本語感覚動詞の特徴―生理的現象から言語表出へのプロセスを

考える―」『言語と交流』 第15号，pp.1-13　凡人社
関口美緒（2013）「生理的境界点・閾値と局面変化完了認知基『タ』の関係」『言語と交流』第16号，pp.94-107　凡人社
関口美緒（2014）博士論文『日本語心理動詞研究-生理的・心理的現象から言語表現までを考える-』杏林大学大学院
関口美緒（2018）「事象『歩く』と『走る』の異同」『日本語・中国語・印欧語―日本語構造伝達文法・発展 D ―』pp.21-30　揺籃社
西村 馨（2014）「『すっきりする』ことについて -言葉から見た心の動き- 」『Educational Studies 57』国際基督教大学 pp.47－55
早石修･伊藤正男（1995）『精神活動の流れを遡る-機能･構造･物質 - Atlas of Brain Mechanisms of Mind& Behavior』メディカルジャーナル社
宮島達夫（1972）『動詞の意味･用法の記述的研究』国立国語研究所　秀英出版
吉永　尚（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院
現代日本語書き言葉均衡コーパス https://shonagon.ninjal.ac.jp/search_result（2020,11, 8 最終確認）

関口美緒さんの「研究者紹介」は『日本語構造伝達文法・発展D』の p.30 にある。

コラムE4

今泉喜一

## 日本語は幸いにも膠着性を保つ

### 屈折語は優れている？

『日本語構造伝達文法・発展D』に，私は「格表示は名詞と動詞の間でなされる」と題する論文を書いた。その一部にこのような趣旨のことを書いた。

ラテン語では，dominus（主人）と言えば，この語末の us で，主格・男性・単数であること，つまり，3要素を一挙に示せてしまう。これは屈折語の特徴である。これが屈折語の優越性とみなされることがあった。

論文ではそのあと次のように続けた。ラテン語は名詞後部に情報を盛り込みすぎたために，名詞後部が複雑になってしまった。そのため，動詞を，紀元前後ごろに，名詞の前に出し，名詞と動詞の間に創出した前置詞に，名詞後部の格情報を移した。名詞後部は単純化した。もし，ラテン語のような屈折語がほんとうに優れているのなら，なぜ，このようにしてこの特徴を消す必要があったのか。

### 格以外の要素は？

論文では触れられなかったが，名詞後部にあった他の要素，性と数であるが，この情報は冠詞と，より単純な複数形を作って表示することになった。（これを言うためには，もう少し調査と考察が必要である。）

### ロシア語の不徹底

論文ではロシア語にも触れた。ロシア語は，先進国イタリアのラテン語同様，前置詞を持つようになったが，名詞後部の格の要素も残した。イタリアほど改革が徹底していなかったわけで，逆に言語がいっそう複雑になってしまった。改革が徹底しなかったのは，先進国の表面的なまねに終わったためではないか。

### 言語として優れているとはどういうことか

言語として優れているとはどういうことか。論文から分かることは，単純であること である。言語はひとたび複雑化すれば，単純な形に戻そうとする。その戻し方は，ラテン語の場合，動詞を名詞のまえに出し，動詞と名詞の間に創出した前置詞に格を移すことによって，複雑化した名詞後部を単純化することだった。

### 日本語は幸いにも膠着性を保つ

日本語は幸い膠着性を保っており，文法的要素を名詞のあとに順次付けたしていく。このような膠着語の特徴は，文法要素の透明性が高く，文法構成が分かりやすいということである。これが人類の元来の言語の姿であった。印欧語も元は膠着語であった。

日本語は膠着性を保っており，単純化することこそあれ複雑化はしていない。だから，印欧語のような語順を変えるほどの改革は，まったく必要がなかった。